

## 学習経験と意識・行動の変化に関する調査

著者	藤木 清, 田中 亜裕子, 吉田 武大, 伊藤 創
雑誌名	教育総合研究叢書 = Studies on education
号	9
ページ	25-38
発行年	2016-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1084/00000463/">http://id.nii.ac.jp/1084/00000463/</a>

## 学習経験と意識・行動の変化に関する調査

### Research on Mental and Behavioral Change along with Learning Experience

藤木 清\*      田中 亜裕子\*\*      吉田 武大\*\*\*      伊藤 創\*\*\*\*  
Kiyoshi FUJIKI    Ayuko TANAKA    Takehiro YOSHIDA    Hajime ITO

#### 抄 録

大学での学びを通して、比較的高い成果を上げている学生がいる。本研究では、特に高い成果を上げている関西国際大学の学生を抽出し、フォーカス・グループインタビューを実施した。これらのインタビュー内容をまとめた結果、彼らの成長に寄与したであろう経験は、1) 一定の厳しい環境に身を置いたこと、2) その厳しさを乗り越えるための友人、教員からの刺激やサポートがあること、3) 大学での学びと社会との繋がりを感じられ、学習の意義を感じられること、などであったことが明らかになった。

#### I 調査の目的

関西国際大学では、1998年度の開学当初から様々な教育方法を取り入れてきた。特に、学外の体験型プログラムについては、開学時からインターンシップを導入し、また、2008年度に初年次の正課科目としてサービラーニングを導入している。そして、2014年度には、「インターンシップ」もしくは「サービラーニング」の選択必修化を行っている。海外のプログラムについては、2001年度に「異文化体験プログラム」などの正課外の短期プログラムを実施し始め、2011年度には「グローバルスタディ」の全学必修化（保健医療学部では選択科目）を行っている。

また、学内においては、初年次セミナーをはじめ、低学年から少人数ゼミを設けたり、通常の授業においてアクティブ・ラーニングの手法を用いたりするなど、学生が授業に参画しやすい教育方法を実施してきている。

さらに、上記のような教育プログラムだけでなく、メンター制度、SA制度、オープンキャンパスのヘルパーなど、学生が正課外で大学の活動に参画できる機会もまた多く設定されている。

このようなインパクトの高いプログラム等は、学生の学習意欲の高まり、共同体意識の醸成、汎

---

\* 関西国際大学グローバル教育推進機構 教育総合研究所学内研究員

\*\* 関西国際大学グローバル教育推進機構 教育総合研究所学内研究員

\*\*\* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

\*\*\*\* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

用的技能の成長実感などの効果が認められることが、明らかになっている<sup>1) 2) 3)</sup>。

## II 調査の方法

調査方法は、教育福祉学科、英語教育学科、人間心理学科、経営学科のそれぞれに所属する教員から、「本学に入学してから“伸びた”と思われる学生」を複数選んでもらい、その中から各学科3もしくは4人の学生をインタビューの対象として抽出した。

そして、本稿の共同執筆者が所属する学科の在籍学生に対して、半構造化のフォーカス・グループインタビューを実施した。インタビューは表1の内容を中心に行った。

なお、インタビューの際には文書（「ユニバーサル型大学の教学マネジメントと学習成果の関連」に関するインタビュー調査への協力依頼）を用いてインタビューの目的、内容と方法、所要時間、録音について説明し、同意を得た。

表1. 主なインタビューの内容

1. 大学生活を通して自分が成長したと思う経験について
2. その経験の前と後では自分がどのように変化したかについて
3. 自分のキャリアパス・プランなどについて
4. 自分のパーソナリティについて
5. 先輩へアドバイスするとすれば、どのようなことか

## III インタビューの結果

### 1. 教育福祉学科

本節では、教育福祉学科の学生3人（A, B, C）を対象として実施したインタビューをもとに、どのような力が伸びたのか、また、その契機は何であったのかを検討していく。

#### 1.1. 高校時代の性格

まず、インタビューを実施した3人の学生が大学入学前にどのような性格を有していたのかを確認しておこう。

表2. 高校時代の性格

A	子どものときの私は、はっちゃけたい集団に入りたいけど、ちょっと控えるみたいな、そういう静かなところがありました。・・・また、私が一番高校のときと今とで変わったのは、目上の方、大人のかたとか、人に対する社会的な接し方が、一番大きかったなと思います。高校のときも、少なからず大人の方たちと関わってきたのですが、先生といった小さな枠でしかありませんでした。
---	---

B	みんなが行事だったらワーって騒いでいるの、いいなって思うけど、やっぱり自分のキャラ的に無理かなと思って。ちょっと端によるじゃないですけど、一部の仲いい子とかとは、ほんまにワーって騒いでいたので、(自分は) おとなしい感じだったと思います。あんまり目立たずみたいな感じです。
C	あんまり人前で騒ぐようなタイプじゃなくて、静かめの感じで、自分から何かをするっていうことは全然なかったんです。

これらの回答からは、いずれの学生もおとなしい、または控えめな性格であることがうかがえる。また、学生Bのように、大人と接する機会があったとしても、中学校や高校の教員と接する程度であり、比較的限られた人間関係の中で高校まで過ごしていたこともうかがえた。

## 1.2. 伸びた契機と力

高校時代まではおとなしい、または控えめであった学生が大学入学後、どのような契機で力が伸びていったのだろうか。この点を取り上げる前に、力が伸びる前提として、本学の教育の特色であるアクティブ・ラーニングが活発に実施されていることに注意しておく必要がある。この点について、いずれの学生も以下のように言及していたことは興味深い。

表3. 本学のアクティブ・ラーニングについて

A	私、教育学部なので、現役で活動しておられた先生方が、たくさんいらっしゃいました。普通の授業、知識で埋め込むだけの授業じゃなくて、教師になったとき、こういうことがあったっていう現役時代のプチ情報みたいなものを盛り込んでくれる先生がたがたくさんいらっしゃったのが、面白いなと思いました。
B	高校までは、どちらかといえば、先生が一方向的に話して、それをノートするっていう感じだったんですけど、大学は能動的に学生が参加できる形になっていて、グループワークで、みんな考えて、みんなの前で発表するスタイルが、私に合っているなと思いました。
C	私もちょっと話を聞くだけっていうだけじゃなくて、自分が実際に授業の計画をしたりとか、実際にしてみたりっていう、将来に向けて確実にやるであろうことが学べているので、力が付いてきているな、将来、絶対、役に立つなっていう実感はしています。

おとなしい、または控えめであった学生が大学入学後、さまざまな授業場面でアクティブ・ラーニングを経験することで、高校までの学びと大学での学びの違いを体感し、自らが変わっていく素地が整えられたことが推測される。

それでは、学生はどのような契機によって、どのように変わっていったのだろうか。

表 4. 伸びた契機と力

A	<p>大学に入ってから部活もするようになって、いろんな先輩方とか、それに社会人の方とか、インターンシップとか、教育実習とか、いろいろ行って、本当の社会に出たしっかりした大人の方たちに出会って、接し方を肌で感じて学んだっていうのが、一番大きいかなと思います。・・・私はインターンシップと塾の講師をやっていたんですけど、2年生から、また1年間、小学校のボランティアに行ったりとかしています。どうしてもお手伝いなんですけれども、自分のできることを自分で判断して見つけるっていうか、今、その先生は、こういう仕事をしているから、自分は逆に違う子どもに対して何かしてあげようとかっていう、臨機応変に対応できるようにはなりました。</p>
B	<p>大学でも、人見知りをしてしまう性格が最初に出てしまって、同じコースの友達が全然できなくて、違うコースの子ばかりと友達になっていました。これ、やばいなと思ったときに、アドバイザーの先生が、「人は変えられないから自分が変わるしかないよ」って言われて。その言葉がすごいしっくりきて、待っているだけじゃあかんねんなんて思って、まずは自分が変わっていこうと思って、自分からあいさつしたりとか、友達がノリで言ってきたら、ノリで返したりとか。でも、困っているときには、ちょっと寄り添ってあげて、話を聞いたりっていうことを心掛けていたら、同じコースだけじゃなくて、違うコースの子とか、先輩、後輩とかも、すごく輪が広がった。自分が変わったから、みんなも受け入れてくれたと思う。</p>
C	<p>大学生になって、それこそ学祭の実行委員であったり、グローバルスタディとかもあったりとか、あとバイト先でも、まとめるようなことをする機会が増えて。そういう機会が増えるにつれて、リーダーとかじゃないですけど、自分から行動を起こして。他の人をまとめるって、そんなんできているか分かんないんですけど、みんなと一緒に何かをしていく。自分が引っ張るような気持ちで何かをしていくっていう機会が増えたので、それは高校のときと比べて大きく変わったことなので。先生になる上でリーダーシップ性も必要になってくることだと思うので、すごいよかったなと思っています。</p>

これらの回答をみる限り、教育実習等の学びやアドバイザーからの助言といった一度限りの体験なり経験なりが学生の成長に直接的な影響を及ぼしていたわけではないことが分かる。そうした一度限りの体験や経験を契機としつつも、その後も、教育実習やインターンシップ、グローバルスタディといった体験的な学修や、学園祭の実行委員やアルバイトなどのような課外活動を積み重ねていくことによって、次第に成長が実感されていったことがうかがえる。

また、これらの積み重ねによって、いずれの学生にも積極性やコミュニケーション力が向上していることは明らかであろう。特に、学生Cはリーダーシップを発揮する力も身につけてきているという点で特筆に価するといえる。なお、3人の学生に、上述のような伸びた力でKUIS学修ベンチマークに対応するものは何かと尋ねたところ、学生Aは社会的能動性、学生Bは共感的態度、学

生Cは多様性理解、共感的態度、そして意見交換・調整力を挙げた。これらはいずれも、大項目である「社会に貢献できる人間になる」「心豊かな世界市民になる」「コミュニケーション能力を身につける」に含まれるものである。

### 1.3. 伸びていない力

学業や課外活動など、さまざまな体験や経験を積み重ねてきた3人の学生にとって、依然として十分身につけていない力は何なのであろうか。この点について、該当すると思われるKUIS学修ベンチマークを尋ねたところ、次のような回答がなされた。

表5. 伸びていない力

A	計画・実行力ってというのは、実行力が特にもう落ちてきましたね。計画するけれども、実行は、なかなかできにくくはなってきました。
B	私は、問題発見力が、あんまりないかなと思って、いろんな問題とか、現状とか見ても、どういったことが問題なんやろうって、あんまり考える力がないので、そこが持ってないところかなって思います。
C	私も、ちょっと卒論心配なんですけど、計画・実行力が、ちょっとできない。計画すらもできないので、そこは、ちょっと苦手な部分です。

積極的に他者と関わり、コミュニケーションを取ることができるようになった一方で、学生たちは、計画・実行力と問題発見力が十分身につけていないと述べていた。これらはいずれも大項目「問題解決能力を身につける」に含まれる項目である。問題を発見し、解決する能力の育成が政策的にも重視されていることを踏まえると、今後、この能力をどういった場面で、どのように身につけていくべきかを検討していく必要があると思われる。

## 2. 英語教育学科

英語教育学科では、同学科所属の複数の教員に“本学に入学して伸びたと感じる学生”を2年生、3年生から複数人選んでもらい、その中で複数の教員から指名があった学生(各学年4人ずつ)に、インタビューを行った。

### 2.1. 社交性を求められる環境

今回、インタビューを行った8人は、大学内では、教員、また友人も認めるハイ・パフォーマーである。しかし、彼らのうち3人は、高校時代は不登校気味、また彼らを含む5人が自らを人見知りや社交的ではなかったと語る。しかし、本学に入学して以降、良好な友人関係を構築でき、以前よりはるかに社交的になったという。これには、いくつか理由があろうが、彼ら自身の分析では、数多くの授業でグループワークに従事せねばならず、またそのグループ構成メンバーが毎回入れ替わ

ることが大きい、ということである。また彼らの多くが、オープンキャンパスのスタッフやメンター、学園祭の実行委員といった、正課外の活動に従事しているが、こうした何かの運営に責任を持つ立場についての経験は、単に友人関係が構築され、社会的になるというだけではなく、関連するメンバーに偏りなく接したり、個々の特性を把握しつつ接したりすることにより、自らの人間関係調整力、リーダーシップなどを大きく向上させたとも述べている。

彼らは、他人と話さなければならない環境に半強制的に置かれなければ、自らはやらなかったということも自覚している。その点をよく理解しているからであろう、後輩たちにもこうした場への積極的な参加を勧めていたことも興味深い。

## 2.2. 課題の量

こうした内向的ともいえる性質を持ちつつ高い成果をあげている学生は少なくないと思われるが、彼らは同時に厳しい授業を好むという特質も持つ。3年生は全員、学科が以前に掲げていた学内では英語のみを使用するという「English Only Policy」の経験者でいずれの学生もその時がよかったと回顧する。また教員の採点等についても厳格な姿勢を求めるようである。自らがきちんと課題等をこなすため、逆に言えば的確で十分な量のフィードバックがない場合にも、かなり不満を抱くようである。英語教育学科は、授業外での課題がかなり多く出されるが、こうした課題の量に、彼らは入学当初は、「パニックになった」「作業としてこなした感がある」という（「手の運動」という表現が出たほどである）。ただ、彼らはそれらをきちんとこなすことで確実に力をつけていき、また「計画的に課題をこなす能力を身につけた」という。だからこそ、その課題の出し方、採点などにも厳しい目を向けることになる。

## 2.3. 周囲との関係

彼らのこうした授業や課題に対する積極的な姿勢はどこから来ているか、との質問には、皆が口を揃えて、先輩、そして留学へ行く友人からの影響を挙げる。入学前にオープンキャンパスに参加した学生は、そこで出会った先輩の流暢な英語に憧れを抱き、参加していない学生もメンターである先輩に同様の感覚を持ったと語る。また留学が決まった学生は、初めての海外生活への不安から多くががむしゃらに勉強をするが、そうした姿を見て、自らも刺激されて、より勉学に打ち込むようになったという。また今回インタビューを行った、2年生、3年生は、学年としてのまとまりもある学年で、「分からないことを教えあう」「モチベーションを高めあう」といった発言も数多く聞かれ、同学年内での刺激も大きいことがうかがえた。

また教員とのコミュニケーションやケアによるところも大きいという。授業や課題に対する質問といった学術的なことだけでなく、人間関係や将来についての話などを気兼ねなくでき、また大学に対して抱く不安や不満などを伝えられることも彼らにとっては大きいと述べる。

## 2.4. インパクトの高い経験

今回インタビューした学生の多くは、性格上は控えめで、授業や課題にも比較的眞面目にとりくむ学生である。その一方、自らの力をすべて出し切って勉学に取り組んだという経験は薄いと語る学生も多い。実際、講義形式の一方的な授業では、授業1コマの集中力が持たないことも多く、決して高校生の頃から所謂「優秀な学生」であったわけではない。

その彼らが自他ともに認めるハイ・パフォーマンスとなった経験として、3年生が一致して答えたのが、グローバルスタディの経験である。彼らの学年の多くは初年次にタイでの3週間のグローバルスタディを経験している。彼らの1人は、英語教育学科に入学したにもかかわらず、特に海外には興味はなく、むしろ出来れば日本を出たくもなかったと述べるほどであった。しかし、グローバルスタディに半ば義務的に参加したことで、大きく視野が広がり、海外への興味が増したという。実際、彼は2年生の春休みに私費でオーストラリアに留学している。つまり、必修であるグローバルスタディへの参加が彼らの可能性を大きく広げたとと言える。また大学入学後すぐに、そうした経験を積んだことによって、その後の大学での過ごし方が大きく変わったことも大きいと思われる。

さらにこうした海外経験だけでなく、サービスラーニングにおいて、日本語を母語としない小学生に日本語を教えたり、家庭の事情で、家に帰れない子ども達の宿題を見てあげたり、話を聞いてともに時間を過ごすことで、「自らの学びと社会とのつながりを感じられる経験も大きい」と述べる。ただ、一方で、教職課程を選択していない学生からは、例えばもう少しビジネスの分野の学外の学びを求める声もあった（インターンシップではなく、もっと初年次から履修できるものがより望ましいとのこと）。

## 2.5. 考察

彼らの多くはもともと眞面目に授業や課題には取り組む性格を持つ一方で、入学前は社交性や積極性という意味では十分とはいえなかった。その彼らが、社交性や積極性を求められる環境に置かれることで、そうした課題を乗り越え、また本来の眞面目に勉学に取り組む姿勢と、友人からの刺激、また教育プログラムによって認識させられる自らの学びと社会や世界への接点、などを得ることによって、より大学での学びに深く関わっていくように感じられた。またそこに適切に教職員の指導やアドバイスなどが加わることで、さらに彼らの学びへの動機付けを増し、より充実した大学生活に繋がっていく。ハイ・パフォーマンスは、こうした好循環に乗っているといえる。

## 3. 人間心理学科

人間心理学科では、2年生、3年生の中から「本学に入学して伸びたと感じる学生」を、人間心理学科の教員が選出し、3人の学生（D：3年生、社会心理学専攻、女性 E：3年生、犯罪科学専攻、女性 F：2年生、臨床心理コース、女性）にグループインタビューを実施した。これらの学生はともに成績上位であった。

### 3.1. 成長を促した活動と参加のきっかけ

まず、自らの成長を促したと思う活動と参加のきっかけについてまとめた。Dは積極的な参加、E、Fは他者からの誘いが活動参加のきっかけになっている。活動に対する意欲はD、Eが高く、Fは低い。このように、成長を促したと思われる活動に参加した当初の積極性、モチベーションは様々であることがわかる。

表6. 成長を促した活動と参加のきっかけ

	成長を促した活動	参加のきっかけ	活動に対する意欲
D	グローバルスタディ	グローバルスタディが入学動機であった	自分がやりたいものに参加
E	COC(Creator of Open Campus)	先輩の誘い	やろうと思えばできると思い、心理の代表に
F	COC	先輩の誘い	先生や先輩に誘われて

### 3.2. 活動を通じた他者との関わり

次に、活動を通じた他者との関わりについてまとめた。3人ともよき仲間、よき先輩との出会いの影響が強く、教職員との関わりも同様であることがわかる。他者の言動は「成長のきっかけ」を与えるし、自分が受容されているという感覚が活動への意欲を持続させ、他者を鏡にして、内省や振り返りを行っている様子が見取れる。

表7. 活動を通じた他者との関わり

	仲間との関わり	教職員との関わり	その他の関わり
D	活気のある仲間が多く、刺激になった。自分と違うことを勉強(福祉、教育)していて、とらえ方が違い、視野が広がった	引率教員の言葉が心に響いた。 「いかに自分が無力かを知るプログラムだ」「お前ら、選択肢はあるのに選んでないのでは？」	フィリピンの高校生の子をみて、こんなに一生懸命やっているんや、と。現地の子供は意欲が強く、自分はこんなふうに勉強してたかな、意欲があったかな、と。
E	先輩方がいい人で、後輩も信頼してくれて。もっと自分を解放して、自己開示したらと。	先輩とか先生がいることによって、成長できる場を作ってくれた。とりあえずお前たちやってみろ、カバーは俺たちがする、と。失敗	オープンキャンパスで高校生に将来を振り返る機会があった。自分を振り返り機会がなんでもいいからあることが大切。

		したときは反省して、次に つなげれば良い、と。のび のびしている。先輩と先生 と職員さん。	
F	シュミレーションしてや ばいな、と思ったら、も っとこうせなあかん、と 思うほうだけど、先輩方 がとりあえずやってみよ うと。「ええ、いいん？」 と。こういう考え方もあ るんか、と。(皆うなず く)	「おまえも行くか」と。え っやめられへんのどうしよ う、という感じ。きっかけ を作ってくれた。関わりが 深まった。知っているとき 先生の授業ちゃんと聞こうと 思えるようになった。	—

### 3.3. 経験前後の変化

自分の成長を促した活動で、その経験の前と後では自分がどのように変化したかを尋ねた回答をまとめた。3人とも積極性や肯定的なとらえ方に変化があったと答えており、Dは人間関係の広がり、Eはモチベーションの向上、Fは機会に対する感情的反応の変化を挙げている。

表8. 経験前後の変化

D	積極的になったのはあると思うけれど。1年の時自分の中にももって表に出さない感じだったので。グローバルスタディで本当の自分、他人にどう見られてもいいと。他人とのコミュニケーションも。人との関係が広がって増えた。人間関係が増えた。
E	ポジティブになったのと、自ら行動するようになった。今まではやろうという気持ちはあったが、やらなくてもいいか、と。でも実際に1つでもやってみて成功したら、自分は可能性があるんだと楽しくなってきて、モチベーションが上がってきた。せつかくいい強みあるのに、何もせずに終わるのはもったいないし、人のためになるのなら、と。
F	機会をもらったときに、前まではしんどいし、面倒くさいからやりたくないと思っていたけど、声をかけてもらえたことがうれしいなと思えるように。声をかけてもらったら参加しようと思えるようになった。COCになってからコミュニティスタディでリーダー、オープンキャンパスで発表と。今までやったらほかの人に、と思ったけど、今は自分と。

### 3.4. パーソナリティの変化について

高校生までの自分と現在の自分のパーソナリティの変化についての回答を表9.にまとめた。

表9. パーソナリティの変化

	パーソナリティの変化	物事の捉え方, 行動, 自己開示の変化
D	自分では変わっているつもりはない。失敗のことについては、中学から失敗せずに来てたので、とくに挫折というのがなくて、その分、自分のキャパを超えることはあった。今は失敗することが怖くなっていて、悪循環。失敗はしとかなあかん、と思いつつ、でも失敗はこわいからしないように、と。	大学の友達には神経質と言われる。それはいろんなものを捉えようと気をめぐらしている感じが神経質とされているのかな？行動はやってみよう。昔はどうせ無理という感じやった。今は、やってみて（うまくいかなくても）自分がかんばらんかったせいやな、と。一歩が出るようになった感じ。
E	性格は変わっていない。	捉え方が変わったのかな。転換ができるようになった。短所でもこうすれば長所になるし、短所でも長所になるし。それが自然とできるようになった。経験と出会い。考え方や行動が変わった。
F	根本的には大きく変化していない。自己評価が低いのは前からずっと変わらない。大学入って、いろいろやっていたことができるようになった、と思うけれど、上には上がいる。そこは変わってない。（皆うなずく）。	根本的には大きく変化していない。まあいいか、と思えるようにだいぶんなった。高校、中学では宿題でしんかったら学校行かれへん。遅刻していくくらいなら、いかへん。今はちょっとくらい、と。今もそんなに話さないが、前より自分を自己開示できる。見せられるように。（皆うなずく）

3人ともパーソナリティの変化はない、と答えており、特にFは低い自己評価について「変わらない」と回答しており、これに全員がうなずいていた。

しかし、物事の捉え方、行動、自己開示について「変化があった」と回答している。3人は活動参加前の特徴として、完全主義的な傾向が強く、失敗への不安が高いと思われる点が共通しているが、E、Fは先輩の「とりあえずやってみる」という自分とは異なる考え方や方略に触れ、モデリングすることで、失敗に対する不安が和らいでいる。また完全主義的な傾向が和らいだことで、自己受容が進み、自己開示ができるようになったことも読み取れる。

一方、Dは「失敗について今でも怖い」と回答している。Dはグローバルスタディの活動終了後、

学園祭の班長に名乗りを挙げているが、その時の経験について「学園祭は全員新人。班長をやってしまったばかりに、だれかやってくれるってほかのメンバーは思ってた、そんなスタンスだったから。」と、自分一人で頑張らねばならなかった胸の内を話している。E、Fと比べると、先輩や教職員の支えもなく、一人で奮闘していた様子が伺える。このような経験の違いから、失敗は「自分がかんばらなかつたせい」と捉えているのであろうと読み取れる。

### 3.5. 考察

教員が選出した「本学に入学して伸びた」と感じる学生3人へのインタビューを通して得られた知見は次の2点である。

第一に、活動への参加当初のモチベーションは様々であり、積極的である学生もいれば、そうでない学生も存在する。

第二に、活動中の様々な経験、とくに他者との関わりは学生の物事の捉え方や行動に変化を引き起こす。他者に受け入れられ、支えてもらう体験は、完全主義的な傾向を弱め、活動へのモチベーションや積極性を高める効果がある。また、自分とは異なる考え方ややり方を知り、実行することは、認知的枠組みの柔軟性を高める。

最後に、これらの変化に3人の個人的な要因が影響を及ぼしているのではないか、という疑問が残る。3人に共通する特徴は、共感性と内省する能力の高さであった。お互いの発言を聴きながら、3人が同時にうなずき、共感し合うという場面がたびたびあった。それは「要するに～ということなんだけど」と体験を普遍的な次元に意味づけたときにたびたび起こった。それぞれの体験は異なっているが、その体験の意味づけにおいては共通するところが多くみられた。自分の体験をより普遍的な次元に意味づけ言語化する能力が、選出された3人は突出していた可能性がある。

これらの点も考慮に入れながら、どのような学習経験を提供することが学生たちのモチベーションを上げるのかを検討していく必要がある。

## 4. 経営学科

経営学科では、3年生の中から「本学に入学して伸びたと感じる学生」を、経営学科の教員が選出し、2人の学生にグループインタビューを実施した。2人ともブライダルコースの女子学生である。

### 4.1. 成長の契機となった活動

特に自分が成長したと思う経験については、一人は3年次のドレスショーを、もう一人はドレスショーとともにグローバルスタディを挙げた。

前者の学生Gは、ドレスショーについて、「企画から準備まで、当日まで全部学生がやったんですよ、先生の手がほとんど、全く入らずに」と語ってくれた。このような経験ができた理由として、「3年生で、自分たちで企画ができるようになったのは、1年生、2年生の業界研究とかインター

ンシップ I があったからこそ自分たちで企画ができた」と説明した。もう一人の学生Hによると、「その前の年にあったキャンパスウェディングで、結構反省点が私たちの中であって、それが結構生かされています」とのことだった。

学生Hは、「積み重ねて成果を出せたのがドレスショー。でもグローバルスタディでも、現地の子どもと話すときに、向こうも英語分からなくて私も英語できないんで、コミュニケーションってやっぱり自分でどうにかして表現するしかないんで、それをやってコミュニケーション取れたことは成長になったのかなって思っている。それもブライダルでお客さんと話するときとかにつながってるんじゃないかなって思います」。また、「授業したときに、何回もやったんですよ、同じ学校でちょっと学年変えて違うことをしたんですけど、やっぱり1回目は全然駄目で、駄目だったことが、次はちゃんとしようっていうみんなのやる気につながって。」とも語っている。

以上の発言から、一度の経験だけでは成長の実感は沸いてこない。複数回の経験を通してはじめて成長できたと思えるようになることがうかがえる。

#### 4.2. 成長した能力

次に、活動を通して成長した能力について述べる。

学生Gは「ドレスショーも、企画するときから、いつまでにこれやっこやっこって、当日がある。誰に頼んだらいいかなみたいなのはやっていました。それをずっと計画力って言っていたんですけど・・・」とのことである。

この能力について、身につけたいと思っていたかどうかについて学生Gに質問した。その結果、「大学に入る前からずっとありますね、計画立てて動きたいっていうのは。例えばテスト勉強するってなったら、テスト期間までを逆算して、これまでにこれやってみたいのはずっとしてきたんで、もともとなかったわけじゃないと思っています。それが、1人でやっていたのが、大学に入って人となんかやるってなったときに、じゃあそれを誰にやらしてもらおうかっていうのを、周りが入ってきたみたいな感じです。別につけようと思っていたわけじゃないですね」と回答している。

一方、学生Hが成長したと感じている能力は前述のとおり「コミュニケーション力」であり、「コミュニケーションに苦手意識はずっとあったんですよ」と以前から身につけたいと思っていた。

このように、2人とも成長した能力として、コンピテンスを挙げている。しかし、学生Gはそもそも計画力があることは自覚しており、それが自分自身だけでなく他者も巻き込むことができるようになった点について成長を感じていることがうかがえる。一方、学生Hはコミュニケーションが苦手であり、これを克服したかったという。言い換えると、学生Gは得意なことをさらに伸ばした事例である一方、学生Hは自分の弱みを克服した事例であるといえよう。

#### 4.3. 成長の実感

さらに、学生Gに教員の指導の有無について質問したところ、ほとんど自分たちだけで実施したという。その結果、「(指導教員に)『すごいね』とか、『そこまでやってんの』とかは言ってくれま

したね。それはうれしかったよね。やればできるんじゃない、みたいになりました。」とのことであり、高いハードルをクリアしたときに、承認されることで、より成長の実感が増す様子がうかがえた。

#### IV まとめ

以上、本稿では、比較的高い学習成果を上げていると思われる学生を対象に、どのような経験を通じてどのような成長があったのか、あるいは感じているのか、インタビューの結果について述べてきた。

その中で、彼らの成長に寄与したであろう経験は、1) 一定の厳しい環境に身を置いたこと、2) その厳しさを乗り越えるための友人、教員からの刺激やサポートがあること、3) 大学での学びと社会との繋がりを感じられ、学習の意義を感じられること、などであったことが明らかになった。

また、活動への参加当初のモチベーションは様々であり、また、成長したと実感する力も人それぞれであるが、活動中の他者に受け入れられ、支えてもらう体験は、活動へのモチベーションや積極性を高める効果があったことがわかった。

さらに、彼らの変化には個人的な要因が影響を及ぼしている可能性が認められた。体験した内容は異なっているものの、いずれの学生も自分の体験を内省し、より普遍的な次元に言語化する能力が比較的高いという共通要素が認められた。

今後の展望として、引き続き“ハイ・パフォーマ”と認められる学生とともに、それ以外の学生にも同様のインタビューを実施することにより、上述した特性の妥当性が検証できると思われる。

また、学生の多様性が進行する中、より多くの学生の学習成果を高めていくには、大学が提供する教育プログラムや学習支援策に上述した要素を考慮していく必要があると思われる。

#### 【参考文献】

- 1) 伏木田稚子・北村智・山内祐平「学部3，4年生を対象としたゼミナールにおける学習者要因・学習環境・学習成果の関係」『日本教育工学会論文誌』 35 巻3号，157-168 頁，2011
- 2) 山内乾史「教養教育における少人数ゼミに関する一考察(その1)：他大学における実施状況」『大學教育研究』 11 巻，1-22 頁，2003
- 3) 山本秀樹「ジェネリックスキルの獲得に向けた大学教育プログラムの研究～海外サービスラーニング(カンボジア)における実践から～」『関西国際大学研究紀要』 11 号，47-55 頁，2010

## Abstract

There are some students who grow much more than other students although both are supposed to have same learning experiences in the university. We extracted those highly growing students in Kansai University of International Studies, and on whom we conducted focus group interviews. The interview result indicates the following three experiences should be the keys to their successful progresses in the university, namely, 1) they are exposed to strict circumstances, 2) they get support and stimuli from friends and faculties surrounding them, 3) they can figure out the meaning of their learning by finding the connection between their learning and real society.